倉敷・博多殺人ライン

深谷忠記

中公文庫

中公文庫

倉敷・博多殺人ライン

定価はカバーに表示してあります。

1997年10月3日印刷
1997年10月18日発行

著者　深谷忠記

発行者　笠松　巌

発行所　中央公論社　〒104 東京都中央区京橋2-8-7　振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部)　03-3563-3664(編集部)

©1997 CHUOKORON-SHA,INC. / Tadaki Fukaya

本文・カバー印刷 三晃印刷　用紙 王子製紙　製本 小泉製本

ISBN4-12-202966-X　C1193　Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

倉敷・博多殺人ライン

中央公論社

目次

プロローグ　7
第一章　博多と倉敷　19
第二章　盗用の背景　78
第三章　疑惑の連関　126
第四章　脅迫の符合　172
第五章　渓谷の死者　229
第六章　倉敷と山口　268
第七章　暗闇の旋律　316
エピローグ　354
解説　郷原宏　403

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

DTP制作　オフィス・トイ

倉敷・博多殺人ライン

プロローグ

A

彼は目を覚ました。
一瞬、自分の部屋かと思ったが、違う。
暗く、どこにいるのか見当がつかない。
頭を持ち上げると、割れるように痛んだ。
顔をしかめ……ハッと息を呑んだ。
肌に触れる毛布の感触……。
全裸だったのだ。
いや、自分だけではない。
傍らに誰かいた。

やはり裸の……女性のようだ。
いったい、どういうことか――？
彼は驚きながらも、ガンガンする頭で考えた。
が、昨夜酔いつぶれたことまでは憶えているものの、その後の記憶がまったくない。
目が少し闇に慣れてきた。
カーテンを透して入ってくる街灯の明かりに、彼女の部屋らしいと見当がついた。
ということは、自分はあれから、彼女の部屋に来たのだろうか。
そう思い、彼は更に愕然とした。
彼女は昨夜、アパートにいるはずがないからだ。
彼女が不在となれば、自分と一緒に寝ている女は……。顔を反対側に向けているが、沖田碧としか考えられない。
〈自分は碧と……！〉
彼は跳ね起きた。
毛布がめくれたからか、傍らの女が「うーっ」というような声を出したが、目を覚ました様子はない。
彼は、胸が早鐘のように鳴り出しているのを感じた。どうすべきか、分からなかった。
ただ、女の身体に毛布をかけてそっと布団を降り、自分の衣類を探した。

布団のすぐそばにあった。
彼は急いでそれらを身に着けた。
そのとき、今度は女が目を覚ましたらしく、首を起こした。「誰？」と聞いた。
やはり碧の声だった。
彼は答えられなかった。
逃げるように玄関に行って靴を履き、部屋を飛び出した。
東の空がかすかに白くなり出していたが、街はまだ暗かった。どこという当てもなく、闇雲に歩いた。
彼が、碧が自殺したと聞いたのは、翌日になってからだった。

B

編集長の西村が手紙を読み終えたらしい。
横に立った美緒のほうへ肘付き椅子を回して顔を上げ、
「これがきたのはいつ？」
と、聞いた。
「さっき出社すると私の机の上に置かれていましたから、昨日、私が金沢へ出張してい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

るときのようです」
美緒は答えた。
西村が、机の上に置いてあった封筒を取って、裏、表と返して見て、
「差出人の牧野という男には、全然憶えがない？」
「ありません。そこに書いてあるように、『長谷見庸高担当編集者殿』という宛名になっていて、私の名前が書いてあったわけじゃありませんし、相手も私なんか知らないんだと思います」
「うむ」
西村が顎を引き、封筒を置いて、手にした二枚の便箋に視線を戻した。
興味を引かれているのは確かだと思う。ただ、それ以上に、どうすべきか迷っているようだった。
問題の手紙は、東京都西多摩郡檜原村の牧野慎一郎という男から、「清新社文芸部・長谷見庸高担当者」つまり美緒宛に届いたものである。内容は、彼女の担当する推理作家・長谷見庸高に関するものだった。二カ月前の七月下旬、長谷見が宝林書房から書き下ろしで出版し、ベストセラーになっている『青い虹の幻影』は、牧野が宝林書房に投稿した『青春の殺人』から作品の核になっているアイディアを盗用したものだ――というのだ。

「どうしましょうか？」
美緒は指示を求めた。
「そうだな……」
西村は顔を起こさず、指でつまんだ便箋を前後に小さく振っている。
いま、部屋にいるのは二人だけだった。
「まさか、これを長谷見先生にお見せするわけには……」
美緒が言いかけると、西村は今度は慌てて顔を起こし、
「そんなことはできんよ！」
怒ったような声で遮った。
「ええ」
と、美緒は応じたものの、西村に気づかれないように眉を寄せた。長谷見に見せるわけにはゆかないし――と言おうとしたのに、他人の話を最後まで聞いてからにしたら、と言いたかった。
頭の薄くなったこの上司を、美緒は嫌いというわけではない。が、このせっかちなところだけは厭だった。
「ま、しばらく私が預かっておこう」
西村が結論を出した。というか、結論を保留し、便箋を封筒に収めた。

「そうですか」
美緒は、手紙が自分から離れたことに多少ほっとしながらも、何か物足らないものを感じた。
「じゃ、私は何もしなくていいんですね」
と、聞いた。
「何も……って、きみは何かしようとしていたのかね？」
西村が咎める目を当てた。
「この牧野という差出人に一度電話して、真意を尋ねてみようかと……」
「住所から電話番号を調べて？」
「はい」
「住所も名前も出鱈目じゃないかね」
西村が言ってから、顔をしかめ、「いや、もし出鱈目でなかったら、かえって困る。長谷見さんを怒らせてみろ。今後、うちの仕事をしてもらえなくなるぞ。牧野という男などと関わりになるようなことは絶対にせんでくれよ」
好奇心旺盛な美緒の性格を知っているだけに、最後は真剣な表情で釘を刺した。
「編集長がするなと言われるんなら、もちろんしません」
「うん」

美緒の返事に、西村の顔がなごんだ。
「ただ」
と、美緒は言葉を継いだ。
「何だね、まだ何かあるのかね？」
じろりと下から見上げた。
可愛い部下を見る目じゃない。
「いまの手紙に書かれていた内容が私は気になるんですが、編集長はなりませんか？」
「ならないことはないが」
「では、長谷見先生の『青い虹の幻影』が他人の作品のアイディアを盗用しているというのは事実だと思いますか？」
「事実かもしれんし、長谷見さんに恨みでも抱いている人間の厭がらせかもしれん。だが、それが事実であろうとなかろうと、うちには関係ない。長谷見さんと宝林書房の問題だ」
「うちにこうした手紙がきたということは、他社の長谷見先生の担当者にも同じ手紙がいっているのかしら……？」
「どうかね。もしどこかの社で騒ぎ出せば、分かるが、いずれにせよ、うちからは何も言い出さないことだ」

編集長の西村の立場では、〝事勿れ〟も仕方がないことかもしれない。そう思いながらも、美緒は何となく不満だった。

自分の担当している売れっ子作家であっても、もし他人の作品からの盗用が事実なら、由々しい問題だからだ。逆にこの牧野慎一郎という男の手紙が長谷見に対する中傷なら、それはそれで長谷見のために事実を明らかにする必要がある。

「もういいだろう？」

外に出ていた社員が戻ってきたからか、西村が話を打ち切るように言った。引出しを開けて、手紙を放り入れた。

美緒は、西村より先に壮に手紙を見せて相談すればよかったと思った。後悔しながら、自分の席へ戻った。

美緒は、神田神保町にある中堅出版社『清新社』の文芸書籍編集部員。壮は、彼女の恋人だった。

壮こと黒江壮。

職業は、水道橋にある慶明大学の数学科教授をしている美緒の父・笹谷精一の助手である。

数学者の娘なのに、かつて算数、数学と聞いただけで蕁麻疹の出た美緒に言わせると、数学などという「陰気」な仕事とはマッチしない、現代的なマスクをした美男子だ。背

もすらりとしている。ただし、現代風なところは容姿だけ。暗いというのではないが、少し喋らないでいると腹がふくれて苦しくなってしまう美緒とは対照的に、極端に無口である。しかも、真剣に考え始めると、誰がいようがどこにいようが、何も見えず聞こえずの「考える人」になってしまう、特技というか、奇癖というか……の持ち主。

年齢は、美緒より四つ上の二十九歳。もうじき三十路にかかろうというのに、この〝宇宙人〟ときたら、まるで世事にうとい。そして、地球人の美緒たちにはチンプンカンプンの数学という〝暗号〟と殺人事件の謎を解くとき以外はあまりにも不器用で、いまだに二人の関係はキスの段階にとどまっている。

そのため、この恋人といると、美緒は時々いらいらする。たとえ腕を組んで夜道を歩いていても、彼の場合、

〈柔肌の熱き血潮に触れながら、寂しからずや暗号を解く君〉

だからだ。

一方、そんな壮に、美緒は、持ちまえの母性本能、世話焼き的な性格をくすぐられないわけではない。それで、惚れてしまったのが百年目と諦め、口の悪い友人たちからは金魚の何とかのようだなどとひやかされながらも、いつもくっついて歩いている。

というわけで、昨日は美緒の出張で会えなかったものの、今夜は水道橋駅前で待ち合わせて一緒に帰り、夕食を作ってやる約束になっていたのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com